

1960・70年代のラテンアメリカの大学論

— ダルシー・リベイロの大学論を中心に —

中 島 さやか

はじめに

ラテンアメリカには特定の思想家によってまとめられた世界的に著名な大学論は存在しないが⁽¹⁾、旧宗主国であるスペインの大学や、ラテンアメリカの多くの大学が参考にしたヨーロッパや北米の大学とは異なる、地域レベルで一定の共通した傾向のある大学モデルを発達させてきたという歴史がある⁽²⁾。

独立後のラテンアメリカの大学は、それぞれの国や個々の大学の個別の事情に従って発展してきたものだが、ラテンアメリカ全般に及ぶ歴史に残る大規模な大学改革運動が起こったことが20世紀を通じて二度あった。一つ目は1918年、アルゼンチンのコルドバ大学から広がった運動であり⁽³⁾、二つ目は大規模な社会改革運動とも結びついた60年代から70年代にかけての大学改革運動である。この60年代からラテンアメリカの多くの国々で起こった大学改革運動の背景には、ラテンアメリカ独自の大学モデルともいえる共通の要素を持った理想の大学像が存在していた。

本稿では、ラテンアメリカの多くの国々の大学改革運動に影響を与えた1960年、70年代の大学論について、当時を代表するダルシー・リベイロ(Darcy Ribeiro)の著作を中心に取り上げ、簡潔に紹介・分析したい。

60年代のラテンアメリカの大学論

60年代はラテンアメリカの多くの国で大学論が花開いた時代であった。大学に関する議論は、大学改革運動に積極的に参加した知識人や学生の間のみにとどまらず、国によっては著名な政治家や社会的にも影響力のある聖職者なども巻き込む重要な政治問題の一つでもあった⁽⁴⁾。

この時代、ラテンアメリカを代表する知識人であるブラジルの教育家パウロ・フレイレ(Paulo Freire)やメキシコの哲学者レオポルド・セア(Leopoldo Zea)などにも大学に関する著作がある中でリベイロを取り上げるのは、彼の著作が当時のラテンアメリカの大学人に実際はかなり広く読まれていたこと、そして、この時代のラテンアメリカの大学論に特徴的な議論の多くが盛り込まれている、という二つの理由からである。ここで紹介・分析するリベイロの思想は、彼の著作が直接ラテンアメリカの大学改革運動に影響を与えたというよりも、この時代のラテンアメリカの大学論が体系的にまとめられているものであるという意味で取り上げたい。

ダルシー・リベイロと彼の大学論

今日の日本でリベイロが研究対象として取り上

げられるのはごくまれであるので、具体的な内容に入る前に、リベイロについてラテンアメリカの大学改革に関する業績を中心に簡潔に記しておく。

ブラジルの著名な人類学者であったダルシー・リベイロは、50年代後半から60年代前半にブラジルの教育界で活躍し、文部大臣を務めブラジルの大学改革に携わった人物である。ブラジリア大学の構想・設立にあたっては100人以上の様々な分野の学者を招集し国家にあるべき大学像について研究した。その成果に基づいて大学改革に具体的な提案を行うが、64年のクーデターで国を終わられて亡命する。その後、ウルグアイ、アルゼンチン、チリ、メキシコなどラテンアメリカの様々な国をまわり彼の大学論を紹介・出版する傍ら、各地で教育関係者や大学改革運動に携わる大学人や政治家などに大学改革についての助言を行った。彼の著作は体系的にまとめられた大学論として、60年代から70年代にかけての大学改革運動の文脈で、ラテンアメリカの多くの国の教育人や知識人、学生に広く読まれた。リベイロが本の形でまとめた著作は出版された国によってタイトルや詳細は異なっても内容はほぼ同じである。

ここで取り上げるのはメキシコ国立自治大学から1982年に出版された *La Universidad Necesaria*^⑤ である。これは1968年から75年にかけて、ウルグアイ、ベネズエラ、メキシコ、チリ、ペルー、アルゼンチン、アルジェリアなどで発表・出版されたリベイロの原稿や著作の集大成であり、彼のラテンアメリカの大学についての分析や主張がここに集約されている。

5つの主要な章からなるこの本の中でリベイロは、まず第1章で60年代後半からの世界の大学の危機的状況の問題と原因を紹介し、第2章で主に仏・英・独・北米・旧ソビエト連邦の例を中心に世界の代表的な大学の発展の歴史、そのシステ

ムの特徴や構造、現状、長所や問題点を簡潔に紹介する。第3章ではラテンアメリカの大学の構造や特徴などを統計的データも挙げながら分析し、その問題点を発展の歴史にまで言及しながら列挙する。そして第4章ではその問題点を克服するための改革案を、改革にあたって起こりうる問題点も含めて提示し、最後に第5章で自立的発展に向けた大学の組織構造、三つのサブ構造からなる「三分割」(tripartita)モデルをその詳細も説明しながら提案する。

リベイロはこの著作の中で、ラテンアメリカの大学の60年・70年代の現状を批判し、理論に基づいた組織改革モデルを提示するが、その内容は財政基盤、組織構造、教育内容、人材、海外依存の傾向の強いラテンアメリカのアカデミック文化、カリキュラム、各学術分野の問題点や相互関係、社会全体における高等教育システムとしての大学の問題点その他、実に幅広い側面に及んでいる。

全章を通じて根底に流れるのは、植民地時代に設立されフランスのナポレオンモデルを取り入れた多くのラテンアメリカの大学が、国家や地域の科学技術、文化の発展に寄与するよりも、エリート層の権益を守るラテンアメリカの不平等な社会構造や先進地域への経済・文化的従属性に寄与する機関になってしまっているという問題意識、及びその大学の構造改革の必要性である。

リベイロは、世界には歴史上、後進的であった国や地域の大学が国家の統一や近代化、後進性の克服や社会の構造変革に貢献できた例もあったことに言及し、大学とは国家の社会構造を変え発展のために積極的な役割を果たすことができる可能性を持った機関であるとする。ラテンアメリカの現状では彼の提示する大学改革はエリート層の反対により困難になることが予想されると冒頭でことわりながらも、構造変革を実施し次世代を担う

人材を育てることにより、ラテンアメリカの大学を国家や地域の発展に寄与できる機関にすることは不可能ではないと考える。

当時大学改革運動のプロセスにあった多くのラテンアメリカの国々にとって「必要な大学」(Universidad Necesaria)とは、国家や地域、国民の抱える様々な具体的問題について研究し解決することのできる大学、社会とのインタラクションを積極的に行い、国家や地域を自立的な発展に導ける大学である。そのために大学はまず、自身の置かれている社会的状況、そして国家や地域の発展にどう具体的に寄与できるかの役割をはっきりと「意識化」しなくてはならず、組織をその目的に従った効率の良い構造に変えなくてはならない。

こうしたリベイロの主張は、今日の視点からすると発展途上国によくみられる大学論にしか聞こえないかもしれない。しかし彼の大学論には、当時のラテンアメリカの社会的・文化的状況、そしてこの時代のラテンアメリカの理想の大学像が色濃く反映されているので、いくつかポイントを絞ってその特徴を紹介する。

第一の特徴は、大学の役割は科学が中心であるとしながらもその科学に政治的・社会的な「責任」(compromiso)があるとしていることである。compromisoという言葉は約束や義務があるという意味で日常でもよく使われる表現だがこの時代、大学に関する議論の中でしばしば「大学や科学が一般社会に対して責任を持つ」つまり、大学は国家の発展や一般社会の役に立たなくてはならない、という意味で用いられた。大学は、科学に「忠実」でなくてはならないが、ここで言う科学とは一般社会に一線を置く閉じたアカデミズムではなく、一般の国民の身近な問題についても研究し、その解決のために尽力し、国家や地域の後進

性の脱却を導く科学である。

また彼は著作の中で「自立的な発展」という言葉が用いられるが、そこで政治や経済面だけでなく「文化の発展」が強調されていることもこの時代のラテンアメリカの大学論の特徴の一つであるといえる。言語や宗教、文化などに旧宗主国の影響が強く残り、また独立後もヨーロッパや北米からの文化的影響が大きかったラテンアメリカの国々では、自国や地域の文化的アイデンティティーをどう構築するかが長年の課題だったが、1960年代はラテンアメリカの様々な地域で文化運動が盛んになった時代であり⁶⁾、多くの知識人やアーティストが、ラテンアメリカが文化的な「従属状態」から抜け出し、「文化的独立」を達成できるようになるという希望を抱いていた。リベイロの示す「文化的独立」には、アカデミックな意味での文化的独立、すなわちラテンアメリカの大学に根強く残る、ヨーロッパや北米先進国の予算や研究成果を重視し、独自の視点を失いがちなアカデミック文化を変えることのほかに、芸術や大衆文化も含む、あらゆる形の文化を自分たちの手で「創造」をすることも含まれていた。

もう一つこの時代の特徴として、リベイロが新しい大学像に20世紀前半までのラテンアメリカの大学論とは異なる、「弁証法的」モデルを想定していることがあげられる。1960年代以前のラテンアメリカでは、大学は文化のない大衆に対して「上から」、いわば一方通行的に文化を「与える」という考えが主流であった。しかし、この時代の大学論で想定される大学モデルは、一般社会について研究してフィードバックを得、それをもとに大学が社会に働きかけ、さらにそのフィードバックを…という大学と社会の双方向の関係を想定したものであった。60年代、ラテンアメリカでは社会の周辺に置かれた労働者階級や地方の農

業従事者、先住民族など、かつては文化がないとみなされる傾向にあった人々について、彼らの中にこそラテンアメリカの文化があるという発想の下に、彼らを積極的に芸術文化や大衆文化の創造のためのテーマにする現象がみられたが、このモデルにもその傾向が反映されている。

最後の特徴としてメディア、主に大学がテレビやラジオをはじめとするマスメディアの分野に進出し管理しようとしたことをあげることができる。この背景には大学の研究成果や文化的蓄積を一般の人々が広く享受できるようにするという理由もあったが、テレビやラジオの番組や映画などが主に先進国の商業的な大衆文化を伝達する手段になってしまっている状況を改善し文化的独立を達成するために、地域で最も重要な文化機関である大学がマスメディア導いていくことが必要であると考えられたからである。メディアにはテレビやラジオのマスメディアのほかにも、演劇などの芸術文化も対象に入っていた。当時、演劇や大衆音楽、壁画などはメッセージを伝達する重要な手段の一つとして考えられていて、文化的アイデンティティの構築のためだけでなく、政治的なメッセージを伝えるためにも重要な役割を果たすとみなされていた。こうしたメディアを通じて大衆にメッセージを伝えることにより意識の向上を図り、最終的には社会の新秩序の構築・新たな文化と人間の創造につなげていくという発想であった。

これらのことを全て「大学から」行えると多くの大学人が考えた背景には、知識や技術が大学に独占的に集中する傾向が当時のラテンアメリカには存在したことがあげられる。今日のラテンアメリカでは60年代と比較すると安定した政府機関や、民間の研究所、文化産業、発達したマスメディアなどを抱える国が多いが、当時は科学技術や知識人・エリート層の大学への集中度が高く、また

今日のようなグローバリゼーションの時代でもなかったため、大学という地域で最も重要な文化機関が社会変革や文化的創造に重要な役割を果たすことができるようになる時代であった。

60・70年代のラテンアメリカの大学論とその実践

60・70年代はラテンアメリカの様々な地域で大学改革運動が推し進められていた時代だった。改革の要因やプロセスは主にその国の社会的文脈や各大学の個別の事情に従っているが、キューバ革命や世界の様々な国で起こった大学改革運動が与えたインパクト、各国の大学人・学生運動家の間での情報交換など、ラテンアメリカの地域レベルでの共通の要素も見られた。リベイロの著作はその一例である。

この時代、ラテンアメリカの大学人の間でしばしば国境を越えて大学論が議論されたり、ラテンアメリカの大学の共通の目標を検討した国際会議が開催されるなど、様々な動きがあった。中でも規模や議論された内容の幅広さという点から、1972年にメキシコ国立自治大学（Universidad Nacional Autónoma de México：略称 UNAM）で行われたラテンアメリカの大学像について議論された *La II Conferencia Latinoamericana de Difusión Cultural y Extensión Universitaria*⁽⁷⁾ は当時の一つの代表的な例である。

メキシコの著名な哲学者レオポルド・セアが中心となり、ラテンアメリカ大学連盟（La Unión de Universidades de América Latina：略称 UDUAL）を主催として行われたこの会議には、ラテンアメリカの41大学から、ウルグアイの文学者・批評家アンヘル・ラマ（Ángel Rama）やペルーの哲学者・教育家アウグスト・サラサル・

ボンディ（Augusto Salazar Bondy）などをはじめとする著名な知識人を含む192名の参加者を集めて行われた。リベイロも参加し、中心的な立場で参加者達に彼の大学論を伝えた。

この国際会議では、上記で紹介した60年代、70年代の大学論に特徴的なテーマが議論され、特に文化面を中心としたラテンアメリカの大学の理想像を実現するための具体的な提案がされたことが興味深い。

会議ではラテンアメリカ地域において大学は、ラテンアメリカ文化について最も蓄積のあるラテンアメリカ文化の「継承的」機関であると考えられ、これをラテンアメリカが文化的従属状態から脱却するためのツールとして活用することが提案される。

その実現に向けてラテンアメリカ独自の文化の創造・普及を促すための文化システム「ラテンアメリカ文化の家（Casa de Cultura Latinoamericana）」を大学に作る事が検討されるが、ここで目標とされたのは、こうした文化的機関を通じたラテンアメリカ文化の情報収集や地域レベルの文化的交流のほかにも、それぞれの大学内にラテンアメリカの映画や演劇、音楽などの創造・普及活動を奨励するための機関を設立し活動を行うことがあった。例えば、大学内に専門の劇団を作ったり、学内での映画の製作を奨励したり、芸術活動を行うための特別コースを設置したり、ラテンアメリカの演劇フェスティバルを開催することなど、その他実にさまざまな具体的な提案が含まれていた⁽⁸⁾。また前述のように、テレビやラジオなどのマスメディアに大学が介入し、文化的に導いていくことが大学の急務であるとされた。

これらの提案が70年代に実際のどの程度実行に移されたかを知るにはそれぞれの国や大学の具体例について個別に調べていく必要があるが、少な

くともUDUALやUNAMに残されている資料から知り得る限り、メキシコやベネズエラの一部の例を除いて実現できた大学は少なかったようである。

60・70年代の大学論や大学改革運動は、ブラジルやチリのように軍政で中断される例もあったが、80年代に入ると政治体制に関わらずグローバル化の文脈の中で急速にすたれていく。

終わりに

変動の時代である60年代から70年代にかけてラテンアメリカにはこの時代に独特の思想ともいえる大学論が存在した。それは、代表例であるリベイロの著作にもみられるように、あらゆるメディアを用いて社会の新秩序の構築、国家や地域の自立的発展、ラテンアメリカの文化的独立に積極的に貢献できる大学であった。これは先進国や今日のラテンアメリカで考えられる大学像とは異なる壮大な大学の理想像であるが、ここには当時のラテンアメリカの一般的な文化的・社会的背景、そしてラテンアメリカの大学が持っていた知や技術・文化の独占状態から来る社会的重要性が反映されている。

今日のラテンアメリカでリベイロの著作に代表される60年代の大学論が省みられることはほとんどないが、この大学論は、ラテンアメリカの現代史の中の一つの大きな社会現象である大学改革運動を理解する上で、また、60年代という時代の思想やラテンアメリカの社会的・文化的状況を理解する上で興味深い思想といえる。

注

- (1) 中島さやか(2005)「ラテンアメリカの大学論 大学と国家・社会・ナショナルアイデンティティーの視点から」、『国際交流研究』第7号, pp.141-

142.

- (2) 例えば、その一つとして幅広い役割を果たすユニバーシティ・エクステンションを大学の3つの最も基本的な役割として法制化していることがあげられる。Judith Licea de Arenasの文献参照。
- (3) コルドバ大学から広がった大学改革運動に関しては様々な研究があるが、ニカラグアの著名な高等教育の研究者 Carlos Tünnermann Bernheimのものなどが比較的入手しやすい。
- (4) 例えばチリの例には、Vial Larraín, Juan de Dios, Eduardo Frei Montalva, Luis Scherz Garcíaらによる *Universidad en Tiempos de Cambio* が1965年に出版されているが、当時の大統領も執筆している。
- (5) Ribeiro, Darcy, *La Universidad Necesaria*, Universidad Nacional Autónoma de México, México D. F., 1982.
- (6) 代表的な例では映画のEl Nuevo Cine Latinoamericano, 大衆音楽の Nueva Canción Latinoamericana など。
- (7) Unión de Universidades de América Latina, Secretaria General, *La Difusión Cultural y la Extensión Universitaria en el Cambio Social de América Latina, II Conferencia Latinoamericana de Difusión Cultural y Extensión Universitaria 20-26 Febrero 1972* の議事録を参照。
- (8) 同議事録 pp. 482-92 を参照。

参考文献

- Acta de la Conferencia de la Unión de las Universidades de América Latina, en 1963.
- Altbach, Philip G, "The University as Center and Periphery," *Higher Education in the Third World*, Maruzen Asia, 1982, pp. 45-65.
- Atcon, Rudolph, *La Universidad Latinoamericana*, ECO Revista de la Cultura de Occidente, Colombia, 1966.
- Fagundes, José, *Universidad e Compromiso Social, Extensao, Limites e Perspectivas*, Diffusi da UNICAMP, Brasil, 1986.
- Francia, Aldo, *Nuevo cine latinoamericano en Viña del Mar*, CESOC Ediciones Chile América, Santiago de Chile, 1990
- Licea de Arenas, Judith, *La Extensión Universitaria en América Latina: Sus Reyes y Reuniones*, Universidad Nacional Autónoma de México, México D. F., 1982.
- Ontiveros Eleazar, *Extensión universitaria un com-*

- promiso con la historia*, Universidad de Los Andes, Venezuela, 1980.
- Ortega y Gasset, José, *Misión de la Universidad y otros ensayos afines*, Revista de Occidente, 1960. (Primera Edición 1930)
- Parker Gumucio, Cristián, "La globalización y sus paradojas: desafíos para la universidad latinoamericana", *Estudios Sociales*, N° 108, CPU, Santiago de Chile, pp. 35-58, 2001.
- Pérez San Vicente, Guadalupe, *La extensión universitaria Tomo I, Notas para su historia*, UNAM, México, 1979.
- Ribeiro, Darcy, *Universidad Latinoamericana*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1971.
- Ribeiro, Darcy, *La Universidad Necesaria*, Universidad Nacional Autónoma de México, México D. F., 1982.
- Ruiz Bravo, Rose Marie, *Hacia una difusión cultural universitaria*, Universidad Nacional: Heredis, Costa Rica, 1992.
- Sánchez Macgrégor, J. y Carlos Gómez Figueroa C., *Filosofía y Sistema de la Extensión Universitaria (Modelo UNAM)*, UNAM, México D. F., 1981.
- Scherz García, Luis, *Reforma y Contrarreforma Universitaria en América Latina, un caso significativo*, FLACSO, 1981.
- Tünnermann Bernheim, Carlos, "Aspecto de la Reforma Universitaria de Córdoba Reflejos en la Declaración Mundial sobre la Educación Superior: Visión y Acción", *Universidad Iberoamericana Globalización e Identidad*, Extra América, 1999, pp. 215-262.
- Unión de Universidades de América Latina, Secretaria General, *La Difusión Cultural y la Extensión Universitaria en el Cambio Social de América Latina, II Conferencia Latinoamericana de Difusión Cultural y Extensión Universitaria 20-26 Febrero 1972*, Universidad Nacional Autónoma de México, Dirección General de Difusión Cultural.
- Universidad Nacional Autónoma de México, *La extensión universitaria en la Universidad Nacional Autónoma de México información general 1973-1978, Tomo II*. (recopilación y organización del material a cargo de: Lucía Martínez Villegas e Hilda Rivera Delgado), UNAM, México D. F. 1979.

1960・70年代のラテンアメリカの大学論

Vial Larraín, Juan de Dios, Eduardo Frei Montalva,
Luis Scherz García y otros, *La Universidad en
Tiempos de Cambio*, Editorial del Pacífico, San-
tiago de Chile, 1965.
Zea, Leopoldo, *Sentido de la Difusión Cultural*

Latinoamericana, UNAM, México D. F., 1980.
中島さやか (2005) 「ラテンアメリカの大学論 大学
と国家・社会・ナショナルアイデンティティーの
視点から」, 『国際交流研究』第7号, pp.139-
163.